

中谷宇吉郎雪の科学館通信特別号

中谷宇吉郎没後50周年 特集

没後50年

中谷宇吉郎をめぐる出来事



パネル展「没後50年 中谷宇吉郎をめぐる出来事」
(1.1~12.31)



企画展「中谷宇吉郎と高野興作」のオープニング
(2.17) に届いた花

雪は天から送られた手紙である

宇吉郎



今年二〇一二年は中谷宇吉郎の
没後五〇周年にあたります(命日は四月十一日)。
この間、博士がどのように評価されてきたかなど
博士をめぐる出来事を紹介します。

◇中谷宇吉郎略年譜 …… 2

◇「没後50年 中谷宇吉郎を
めぐる出来事」図録
…… 3~18

◇全国の記念事業スケジュール
…… 19

◇雪の科学館主催の記念事業
…… 20

中谷宇吉郎雪の科学館通信特別号
2012(平成24). 3. 31

発行：中谷宇吉郎 雪の科学館

〒922-0411 石川県加賀市潮津町イ106番地
TEL 0761-75-3323 FAX 0761-75-8088
<http://www.kagashi-ss.co.jp/yuki-mus/>
e-mail: yuki-mus@angel.ocn.ne.jp

(協賛)

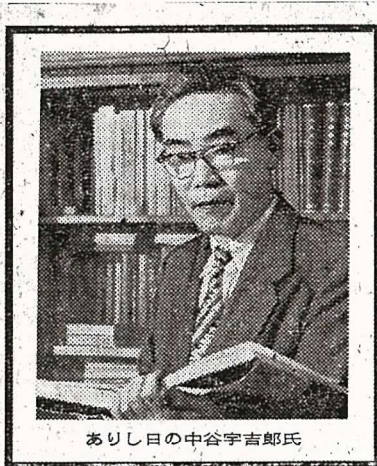
アモーレパシフィックジャパン(株)
東京書籍(株)北陸支社
東京水卸協同組合
全国氷雪販売業生活衛生同業組合連合会
(株)プロセスアート
加賀中央ロータリークラブ

中谷宇吉郎略年譜

西暦	主な出来事
1900	◆7月4日、石川県江沼郡作見村字片山津（現在の加賀市片山津温泉）に、父・卯一、母・てるの長男として生まれる。弟に治宇二郎、妹に富子、文子、武子、芳子あり。生家は呉服雑貨の店を営んだ。
1906	◆大聖寺町の母の実家三森家に預けられ、京達幼稚園に入園。
1907	◆大聖寺町立錦城尋常高等小学校に入学。九谷焼の名工・浅井一毫宅に下宿。
1908	◆この年から小学校卒業まで、旧大聖寺藩主の家令で親類の松見助五郎宅に下宿。西遊記などの読書に熱中する。「百事如意 中宇八才春」の書が遺存。
1911	◆教師のカント・ラプラスの星雲説に深い印象を受ける。この年描いた竹の絵が遺存。
1913	◆小学校を卒業。父・卯一死去。県立小松中学校に入学し、寄宿舎生活。ボート部に入る。
1919	◆第四高等学校に入学。弓術部に入部。
1921	◆田辺元の『最近の自然科学』を読み、物理学を志望する。
1922	◆高校を卒業。東京帝国大学理学部物理学科に入学。
1923	◆寺田寅彦に物理実験の指導を受け、実験物理学を専攻する機縁となる。
1924	◆創刊された東大「理学部会誌」に随筆「九谷焼」を書く。
1925	◆大学を卒業。理化学研究所の寺田研究室の助手になり、電気火花の研究を行う。
1927	◆東大工学部講師を兼任。北海道帝国大学に新設の理学部教授候補になる。藤岡作太郎の長女・綾と結婚。
1928	◆イギリスに留学。夫人・綾がジフテリアで死去し、異郷で訃報に接する。キングスカレッジでリチャードソン教授の指導を受け、長波長X線の研究を行う。
1930	◆北大理学部助教授として札幌に赴任。
1931	◆長波長X線の研究により京都帝国大学から理学博士の学位を受ける。（寺垣）静子と結婚。
1932	◆教授に昇任。雪の結晶の研究を開始する。
1933	◆十勝岳の山小屋白銀荘で天然雪の観測を開始する。
1935	◆北大に常時低温研究室の建築が落成。
1936	◆3月12日、人工雪の製作に成功する。体調が悪く、家族とともに伊東温泉の別荘を借り、2年間の療養を始める。
1938	◆病名が肝臓ジストマとわかり、武見太郎の治療を受ける。最初の随筆集『冬の華』と、『雪』（岩波新書創刊時の1冊）が出版される。
1939	◆製作指導した東宝文化映画「Snow Crystals」が完成。ワシントンの第3回雪委員会に送って上映され、感謝の決議文が届く。凍上の研究を開始。
1941	◆雪の結晶の研究に対し帝国学士院賞が授与される。北大低温科学研究所が発足。太平洋戦争開戦。
1943	◆二セコ山頂に着氷観測所が完成。零戦を運び上げ、航空機着氷防止の研究を行う。
1944	◆根室で霧を消す研究を開始。
1945	◆終戦。
1946	◆農業物理研究所が発足し、所長となる。
1947	◆立春に卵が立つと報じられる中、実験でその誤りを正し、人類の盲点の一例と指摘。石狩川の洪水の総合調査を行う。
1948	◆大雪山忠別川流域の積雪水量調査を行う。
1949	◆『雪の研究—結晶の形態とその生成』（岩波書店）が出版される。後に岩波映画製作所となる「中谷研究室」プロダクションが東京で発足。国際雪氷委員会の招きで、3ヶ月間アメリカとカナダへ出張。TVAなどを視察し、国際雪分類委員会、雪氷永久凍土研究所の設立準備会議などに出席する。
1952	◆アメリカの雪氷永久凍土研究所(SIPRE)の主任研究員となり、2年間、家族とともにシカゴ郊外のウィネッカに住む。アラスカの氷河の単結晶氷を使って、チンダル像と氷の力学的変形の研究を行う。
1954	◆アメリカのハーバード大学から『Snow Crystals, natural and artificial』が出版される。片山津町の名誉町民として表彰される。
1956	◆NHKの講座で「科学の方法」を9回にわたり放送。後年、岩波新書として出版される。ハワイ島のマウナロア山頂で雪結晶の観測を行う。
1957	◆アメリカの国際地球観測年の遠征隊に参加し、初めてグリーンランドへ行く。その後、毎年夏の1～2ヶ月、北緯78°の観測所サイト2で、氷冠の雪氷研究を続ける。文藝春秋愛読者投票で一位になり、名誉賞を受ける。国際雪氷委員会の副委員長に選ばれる。
1959	◆アメリカのウッズホール国際雲物理学会に出席。北極海の氷島T-3を視察。
1960	◆還暦祝賀会が行われ、「助六」を踊る。アラスカのメンデンホール氷河を視察。東大病院で前立腺癌の手術を受ける。北大理学部勤続30年で表彰される。イギリス南極地名命名委員会が南極半島沿いの小群島に「ナカヤアイランズ」と命名。
1962	◆4月11日、骨髄炎のため死去(享年61歳)。正三位勲一等に叙せられる。

逝去

中谷宇吉郎博士は、雪と氷の研究で先駆的業績を遺し、昭和37(1962)年4月11日、東大付属病院において骨髄炎により逝去されました(享年61歳)。その後、正三位勳一等に叙せられました。4月14日、青山斎場で葬儀が行われ、親族や友人、門下生らが多数参列しました。博士の戒名は、円覚寺の朝比奈宗源老師により「文藻院精研浄雪居士」とつけられました。



雪博士 中谷氏の死

藤岡 由夫

中谷君と私は、大正十四年に東大を出た。卒業と同時に、いっしょに理研に入った。中谷君は、寺田眞彦先生の研究で、先生がされていた海軍の飛行船の燃費事故調査を手伝い、球皮の上のスパークの研究から、各種の気体の中のスパークを研究した。寺田先生は、いつも中谷のへやですわって話してんでいられた。その数年

温帯で温暖帯長の調節により、どんな雪でも自由にできるものになった。雪を調べることにより、上層の気象状況が分かる。雪は天からの手紙である」というのが當時の中谷君の得意の言葉だった。雪と同時に極寒の地の凍上の現象も研究、その対策も講じた。戦争中は、飛行場の凍上や、飛行機の着氷、鉱石の凍結の問題などを研究し、おおよそ寒い国の問題——雪、氷、凍上などの研究の第一人者となった。

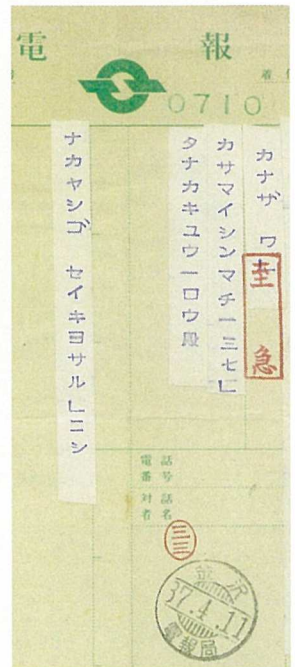
戦後、雪国の雪を早く消す研究などをしていたが、昭和二十五年からアメリカの氷雪研究所に招かれ、シカゴで大規模な研究をはじめた。この間アラスカ、グリーンランドにかけて、大きな氷の車輪を操ってきて研究した。毎年夏にはグリーンランドに行ったのだが、昨年から健康上の理由で、それができなくなった。

今日の物理学は問題が複雑で、大勢の共同研究の方向へ進んでゆく。中谷君のように、一人で一つの問題に深く取り組んでゆく累積型の人は少ない。いま十年もしたら、その業績は歴にノベル賞くらいであったと想う。

若いころから文章がうまかった。寺田先生と同じように、随筆を書く書き、この方が、一般には著名である。専門外のことでも、思い切って入りという自信と勇氣は大したものだ。人情家でもあり、親類の人をはじめよく人の世話をした。天折(ようせつ)した弟の人類学者中谷浩宇二郎君が、フランスで世話になったというので、岡田氏のことを疑いよく世話した。中谷君が学生時代、慶応の篤志家に学費を出してもらっており、大学を出てから、これがサンリーの島井信治郎氏とわかったことなど、君の人生観に大きな影響を与えた。

去年の暮、池田総理とテレビ対談をして力をひき、神経痛になったと言っていたが、そうではなかった。最後の病状が、寺田先生のそれに似ているのも痛ましい。

中谷君の雪の本がハーバード大学で出版されているが、氷の単結晶の本をその姉妹編として出すよう交渉を受けているとのことであった。「しかしメタデータ」といふしそこに突っ当り、思えば死期を予感していたのである。(埼玉大学 長・日本学術会議幹事部長)



逝去を知らせる電報(部分)

逝去を悼み、藤岡由夫が翌日(4月12日)の朝日新聞に寄せた。



悲しみに包まれる葬儀参列者。前列右から和達清夫、茅誠司、孫野長治。

追悼特集号

宇吉郎の没後、日本雪氷学会は学会誌「雪氷」9月号の全ページで追悼特集を発行し、「こころ」、「科学朝日」、「北大季刊」などでも特集が組まれました。



追悼特集が組まれた(左から)心(1962.6)、科学朝日(1962.7)、雪氷(1962.9)、北大季刊(1962.12) 北大地球物理学研究報告(1963.3)。国際雪氷学会のICE(1966.4)の表紙には宇吉郎の掛軸の写りが載った。

国際シンポジウム

1963年8月27日、アメリカのパークレイで開催された国際会議(IUGG:国際測地学地球物理学連合)の際、故中谷博士を記念したシンポジウムが行われました。

故中谷博士記念シンポジウム*

孫野長治**

中谷先生を記念して開かれた第13回 IUGG の氷晶と氷晶核に関するシンポジウムは殊にみる盛会であった。これは関係分野ばかりでなく気象学会にとっても記念すべきシンポジウムと思われるので出席者としてその模様を報告したい。

このような意味の会合が計画されていたことは、先年瀋陽の国際学会で IUGG の会長のバイヤース教授の口ぶりからも窺え、また昨夏の IAMAP の臨時プログラムのにも中谷博士の追悼記念に Session on Snow Crystals が予定されていた。ただ先生は当時すでに死亡されていたので、そのなりゆきを察していたが、昨秋になって Symposium on Ice Crystals and Ice Nucleation と名前は変わったけれど、責任者に名々の磯野教授が任命されていよいよ具体的な形をとって来た。磯野教授の招待した話題提供者9人中、4人までが日本人であり、一方バルチモア在住の先生の孫女咲子オルスン夫人の出席も期待されたので、非常に盛会が予想された。パークレイでシンポジウムの始まる二、三日前から磯野教授がバイヤース教授と会の次席を慎重に打合せ、また前日のさる委員会でバイヤース教授が特に発言して翌日記念シンポジウムであることをアナウンスした。

当の8月27日の朝早めに咲子さんが到着した。私達は定刻前に会場の加州大学法学130番講堂にはいり皆で飾りつけを工夫した。咲子さんが持って来た雪の結晶の分類の掛軸を上下式黒板の裏の釘を利用して正面に垂した。先生の肖像の希望で特に選ばれた遺影の額を演壇の書見台にかざさるつもりであったが、バイヤース教授はどこからか手頃な机を見付けてきてその上になたてかけ、写真の前に氷のETCHINGピットをあしらった白い皿を配

置した。この皿は先生の次女の芙二子さんがデザインして教授に贈ったものである。教授はさらに IUGG 事務長のゴドスン教授に何か耳うちをすると、博士は暫時姿を消したかと思うとフラッシュ付のカメラを首にかけて現れた。自分でシンポジウムの状態を撮影するつもりらしい。会場の最前列に左から右われわれ日本人が司会者の磯野教授を囲んで一回となり、正面に咲子さん、バイヤース教授、同夫人の順で着席した。こんなことで開会が10分ばかりおくれ、少い時間がますます減ったようである。

シンポジウムに先立ち、バイヤース教授は IUGG の会長として追悼と哀悼の辞を述べた。どちらかという親友の死を悲しむ調子であった。つづいて咲子さんを紹介して勇をねぎらい、次にくだんの皿の由来を述べるにあたって、芙二子さんから皿に付して教授にあてた手紙を朗読する限になると会場のざわめきもびたりとすまじり教授の声も震りがち、もちろん私は一瞬国外にあることも忘れ咽喉のつまるのを覚えた。

シンポジウムの次席は次の通りである。

Symposium on Ice Crystals and Ice Nucleation (in honor of the late Dr. Nakaya)

Invited Papers

- 1) Tribute to the late Dr. Nakaya. K. Isono
- 2) Shape of Snow Crystals in relation to meteorological condition. C. Magono
- 3) Growth and conglomeration of snow Crystals. C.L. Hoeler
- 4) Physical processes of growth of hailstone. W.C. Macklin
- 5) Natural nuclei of snow crystals. M. Kumai

- 6) Ice nuclei in the atmosphere. E.K. Bigg
- 7) Mechanism of separation of charge in ice. B.J. Mason
- 8) Solid state of ice crystals with special reference to problems of cloud physics. A. Higashi
- 9) Mechanism of ice nucleation. N.H. Fletcher
- 10) Experimental investigation of ice nucleation. K. Isono

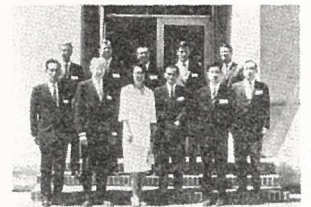
始まってしまえば普通の学会と異なることはない。講師は各々得意とするところを発表しているので内容も題目から想像される通りであった。ただこの中で Mason の分は Latham が代読したし、最後の Fletcher (Bigg が代読予定) 及び磯野教授の分は時間切れのためキャンセルされた。

もともと時間が足りないところを監視の私が10分ばかり超過して全く申し訳ない次第で、こんなことが評されたのは司会が磯野教授なればこそと感謝する次第である。とにかく日本人が多かった故か、こんな気象に感じた講演は始めてで、そういうシンポジウムといっても研究発表会と大差なかったような気がする。途中で会場を見送るとさしもの講堂が満員の盛況で、先生の偉業をたたえるにふさわしい盛会であった。

シンポジウムの終了後、バイヤース教授の発表で口絵のような関係者一同の記念撮影をおこなった。帰国後、

東大の茅先生にシンポジウムの話をしたら、国際学会には減少しないことの由である。IUGG としては最高の敬意を表したものであろう。

ひるがえって昔々の講演の内容が先生の偉業を継ぐにふさわしいものであったか否かとたの誠心心許ない次第である。しかし日本から出席したのはほんの一部にすぎない。研究者の量と今後の可能性を考慮すれば、雲物理学の現状は先生にみてもらっても「まあ、そんなところだろう」くらいの点滅は預けるのではなからうか。



氷晶・氷晶核に関する中谷博士記念シンポジウム関係者一同(昭和38年8月27日、IUGG)

前列左から磯野教授、バイヤース教授(IUGG 会長)咲子オルスン夫人、孫野教授、東博士、熊井博士、後列左からホスラー教授、マッコラン博士、ベンダー博士、ラセム博士、ビグ博士(磯井博士撮影)

宇吉郎のお墓

宇吉郎のお墓が加賀市中島町の共同墓地の一角に建てられ、1965年4月11日、満三年の法要が行われました。お墓の題字は安倍能成によるもので、台座が六角形に作られ、六つの面に異なる雪の結晶形が刻まれています。また、その傍に茅誠司による墓碑銘が置かれています。



法要に集まった人たち。宇吉郎のお墓は白山（東の方）を向いている。
中島町は片山津温泉と動橋の間にあり、中谷家の先祖が住んだ所で、中谷家代々のお墓もある。



茅誠司による「中谷宇吉郎君墓碑銘」



お墓には宇吉郎を偲ぶ人たちがしばしば訪れている。
写真は生誕100年の式典に参加した人たち（2000年7月）。

北大「人工雪誕生の地」記念碑

世界で初めて人工雪の製作に成功した北海道大学の常時低温研究室の跡地に記念碑ができ、1979年7月4日、静子夫人を招待し、門下生や北大関係者が出席して除幕式が行われました。白いみかげ石に六角板結晶をかたどった記念碑は、現在も北大の名所の一つとして親しまれています。



人工雪誕生の地 記念碑除幕式 1979. 7. 4

除幕式の記念写真。碑の右に中谷静子夫人、碑の左は今村成和北大学長。関戸弥太郎、孫野長治など、門下生も多数出席した。



雪の科学館が主催した雪の結晶観察ツアーもこの地を訪れた(2005年12月27日)。

人工雪誕生の地記念碑碑文

この地は、昭和十年十月、常時低温研究室が建てられた場所である。翌年三月、ここで理学部物理学科中谷宇吉郎教授が、初めて雪の結晶を人工的に成長させることに成功した。人工雪の実験は、同年十月天覧の榮に浴し、さらに数年たゆむことなく続けられ、ついに雪結晶生成機構が明らかにされた。この研究により同教授は昭和十六年五月、日本学士院賞を受けた。

その後もこの三十平方米余の小さな低温室からは、凍土、雪、着氷、円板氷結晶などに関する数々の先駆的研究が生み出された。これらの研究成果は、本学低温科学研究所創立の気運を醸成し、またわが国雪氷学・寒物理学発展の基盤となつたばかりでなく、国際的にも高い評価を受けた。この研究室は昭和十六年低温科学研究所分室となつたが、後同所の拡張移転に際して理学部所管となり、昭和五十二年八月、その使命を終えて撤去された。

われわれはこのゆかりの地に碑を建て、北海道大学が世界に誇る雪氷研究の原点を永久に記念する。

昭和五十四年七月四日

人工雪誕生の地記念碑建設期成会

常時低温研究室の規模

鉄筋コンクリート一部二階建

建築面積 一七八平方メートル

延面積 二二四五平方メートル

低温室面積 三三三平方メートル

最低温度 零下五十度

題字 関戸弥太郎

裏に記された碑文の原稿。碑の題字は、初期の人工雪実験に貢献した関戸弥太郎による。

由布院で偲ぶ会

没後、東京、札幌などで宇吉郎を偲ぶ会が開かれてきましたが、8回目の偲ぶ会は1984年7月7日、由布院温泉「亀の井別荘」で行われました。

亀の井別荘には、原宿の宇吉郎の書斎を移築した「雪安居」があります。偲ぶ会を機に、宇吉郎が雪の摩擦実験に使ったスキー板でその扁額を作ろうという話になり、後日、茅誠司が揮毫して入口に架けられました。



由布院での偲ぶ会に集まった人たち。



茅誠司が揮毫した「雪安居」の扁額。



由布院は宇吉郎の伯父・中谷巳次郎が加賀から移り住んで旅館業を営んだところ。宇吉郎の甥の中谷健太郎氏と次郎氏が建てた「普照塔」に亀の井別荘のルーツが記されている。

中谷宇吉郎雪の科学館

1994年11月1日に開館しました。中谷博士の偉業を広く紹介するため、加賀市が磯崎新氏の設計で建設したものです。館内上映用に宇吉郎の世界を紹介する映画「科学するところ」が作られ、『中谷宇吉郎雪の物語』が出版されました。中庭にはグリーンランドの氷河堆石を配し、人工霧が発生する装置が備えられました。

10月31日の落成式は、肌寒い日でしたが、宇吉郎の友人や門下生など多くの関係者が集まり、開館を祝いました。



雪の科学館から柴山湯、白山を望む。



ひととなりゾーンの最初のコーナー。



落成式(10月31日)のテープカット。右から4人目が当時の加賀市長 矢田松太郎氏。その左はデンマーク大使のヘディゴー氏。グリーンランドの氷河堆石を館に移送する際、デンマーク大使の協力が得られていた。

中谷宇吉郎科学奨励賞

雪の科学館が開館した翌年の1995年、加賀市は中谷博士の業績を記念して、科学奨励賞を設けました。その対象は現在、雪氷関係の若手研究者、全国の中校生、加賀市の小学生となっており、若い人たちの科学へ取り組みを励ましています。



第1回表彰式で記念講演する樋口敬二氏（1996年2月6日、片山津中学校で）



受賞者を祝う博士の二女、中谷芙二子さん



2年目から若手雪氷研究者も受賞対象になった。

～ これまでの受賞者 ～

年度	〈加賀市中学3年生〉	〈雪氷若手研究者〉
平成7	土山 克樹（錦城中） 近藤 直樹（片山津中） 中巴出 智子（山代中） 東和中科学部	※
8	錦城中理科部 河村 拓磨（片山津中） 藪井 良康（東和中）	尾関 俊浩
9	錦城中理科部	藤田 耕史
10	天日 聖（錦城中） 坂上 陽介（東和中） 川崎 梓（山代中）	長島 和茂
11	鹿野 晃司（錦城中） 北村谷 仁美（東和中）	八久保 崑弘
12	該当なし	深澤 裕
13	該当なし	坂井 亜紀子
14	該当なし	飯塚 芳徳
15	諸寄 卓之（東和中）	竹内 望
16	該当なし	松岡 健一
17	中川 翔太（山代中）	中澤 文男
18	該当なし	奈良間 千之
19	水上 優（東和中）	紺屋 恵子
※※	〈全国の中校生〉	
20	〈加賀市の小学生〉	該当なし
21	藤田 大生（作見小5） 江守 祐輔（錦城小5）	秋田県美郷町立 仙南中学校科学部 安達 聖

※ 雪氷若手研究者の部は、平成8年度から実施された。

※※ 平成20年度から、加賀市中学3年生が対象だったのを全国の中校生に広げ、新たに、加賀市の小学生も対象に加えた。



受賞者に贈られるトロフィー

生誕100年記念式典

2000年、宇吉郎の生誕100年を記念して、加賀市は「式典とフォーラム」「雪のデザイン賞公募作品展」、「寅彦と宇吉郎の絵画展」などを開催し、日本雪氷学会の全国大会も片山津温泉で行われました。雪のデザイン賞は好評だったことから、その後も隔年の開催で継続されています。



式典とフォーラムは、誕生日（7月4日）に近い7月1日、片山津のテリーナホールで開催された。フォーラムのパネラーは、高田宏、樋口敏二、池澤夏樹の3氏。

**中谷宇吉郎生誕100年記念
寅彦と宇吉郎
の絵画展**

中谷宇吉郎とその弟・今田寅彦は、科学・建築の他、優れた絵画作品も残しました。師弟の絵画や交遊を紹介します。

会期 9月23日(日)～10月15日(日)
期間中無休

会場 片山津地区会館 テリーナホール

時間 午前9時30分～午後5時
(入場は4時30分まで)

入場無料

雪のまち雪のデザイン展 (同時開催)

中谷宇吉郎の雪のデザイン賞公募作品展は、雪のデザイン賞の歴史を振り返る機会でもあります。雪のデザイン賞の歴史を振り返る機会でもあります。

会期 9月9日(土)～11月5日(日) (無休)

会場 片山津温泉(温泉街) 温泉街1丁目

時間 午前9時30分～午後5時 (入場は4時30分まで)



雪のデザイン賞公募作品展のオープニングで講評を述べる川上元美氏（6月17日、加賀市アートギャラリーで）。

寅彦と宇吉郎の絵画展では、2人の絵、計52点を紹介した。

全国各地で生誕100年記念企画

宇吉郎の生誕100年を記念して、2000年冬から東京・代官山のヒルサイトフォーラムで展覧会が開催されました。会期中、皇后様もお出でになり、ご覧になりました。

2001年夏には、銀座で宇吉郎展が開催され、ここでは雪氷実験を沢山のの人に体験してもらい、トークイベントも行われました。

北海道の北広島、新潟県塩沢、大阪などでも記念行事が行われました。



皇后様に挨拶する中谷英二子さんと樋口敬二氏。左手前は磯崎新氏。

代官山での展覧会ポスター。



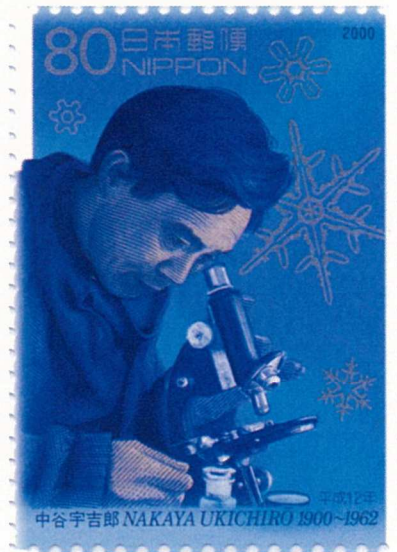
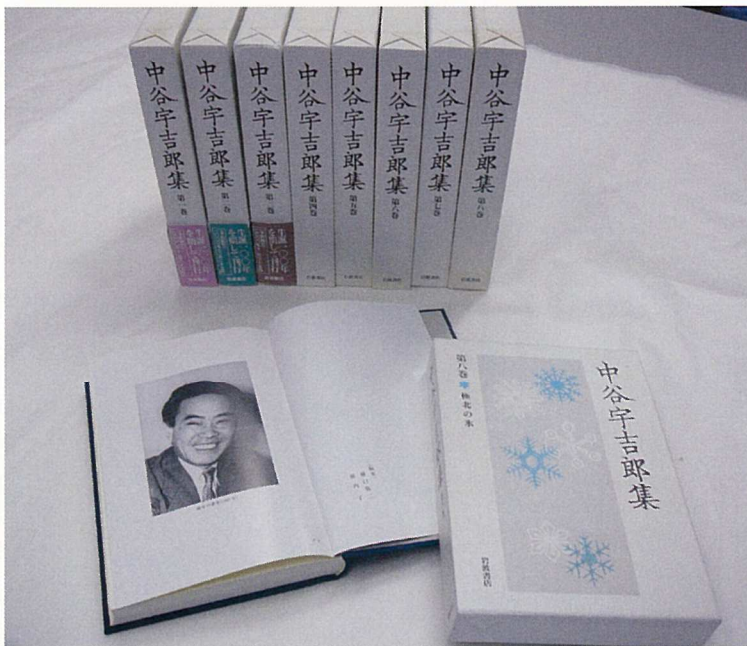
ボランティアの講師団によって、雪と氷の実験が、1時間半の単位で連日行われた。



銀座での展覧会ポスター。

宇吉郎集 8巻 (岩波)、文化人切手

2000年の生誕100年を機に、岩波書店から全8巻の「中谷宇吉郎集」が出版され、宇吉郎の随筆が更に親しみやすくなりました。
また、同年11月6日、郵政省から宇吉郎の文化人切手が900万枚発行されました。



文化人切手

「中谷宇吉郎集」(監修：樋口敏二・池内了)は「寺田寅彦全集」に続いて出版された。寅彦全集の読者から、次は宇吉郎をとの希望が多数寄せられたとのこと。

文化人切手コレクション
中谷宇吉郎
2000年 (20)

文化人切手 (20)
中谷 宇吉郎 (1900-1962年)
発行額 900万枚
2000年11月6日発行

発行所：日本郵便株式会社
(中谷宇吉郎は加賀市出身の偉人の生誕地)

発行所：郵政法人切手製造局

「雪は天から送られた」(載せ)である。北陸大学で教師であった中谷宇吉郎 (1900-1962) は、1900年、富山県で初めて人工的に雪の結晶をつくることに成功しました。物理学、鳥類、社会など、雪の結晶にはさまざまな面があり、人工雪の発明によって、結晶の分野で国際的な名声の頂点を飾るに至るに至るものになりました。その結果、種々たる雪の結晶の形から、それができた土壌の状況が推定できることになり、このことを土壌の調査で発見しました。昭和11年には、雪が結晶の科学で皇室賞を受賞しています。その後も雪や氷のさまざまな結晶分析を続け、晩年はグリーンランドの氷冠の融けに研究を続けました。

宇吉郎は、豊博であるが研究熱心なことで、科学者の偉人として人の心に残り、随筆を書き残しています。自らの随筆の選集や伝記をよまうことで、彼をしのび、彼の業績を伝えることができます。科学者の偉人をしのぶことは、科学者の偉人をしのぶことでもあります。宇吉郎は、その偉大な業績を後世に伝えるために、雪の結晶の分野で国際的な名声の頂点を飾るに至るものになりました。その結果、種々たる雪の結晶の形から、それができた土壌の状況が推定できることになり、このことを土壌の調査で発見しました。昭和11年には、雪が結晶の科学で皇室賞を受賞しています。その後も雪や氷のさまざまな結晶分析を続け、晩年はグリーンランドの氷冠の融けに研究を続けました。

発行所：郵政法人切手製造局

文化人切手コレクション
中谷宇吉郎
2000年 (20)

文化人切手 (20)
中谷 宇吉郎 (1900-1962年)
発行額 900万枚
2000年11月6日発行

発行所：日本郵便株式会社
(中谷宇吉郎は加賀市出身の偉人の生誕地)

発行所：郵政法人切手製造局

「雪は天から送られた」(載せ)である。北陸大学で教師であった中谷宇吉郎 (1900-1962) は、1900年、富山県で初めて人工的に雪の結晶をつくることに成功しました。物理学、鳥類、社会など、雪の結晶にはさまざまな面があり、人工雪の発明によって、結晶の分野で国際的な名声の頂点を飾るに至るに至るものになりました。その結果、種々たる雪の結晶の形から、それができた土壌の状況が推定できることになり、このことを土壌の調査で発見しました。昭和11年には、雪が結晶の科学で皇室賞を受賞しています。その後も雪や氷のさまざまな結晶分析を続け、晩年はグリーンランドの氷冠の融けに研究を続けました。

宇吉郎は、豊博であるが研究熱心なことで、科学者の偉人として人の心に残り、随筆を書き残しています。自らの随筆の選集や伝記をよまうことで、彼をしのび、彼の業績を伝えることができます。科学者の偉人をしのぶことは、科学者の偉人をしのぶことでもあります。宇吉郎は、その偉大な業績を後世に伝えるために、雪の結晶の分野で国際的な名声の頂点を飾るに至るものになりました。その結果、種々たる雪の結晶の形から、それができた土壌の状況が推定できることになり、このことを土壌の調査で発見しました。昭和11年には、雪が結晶の科学で皇室賞を受賞しています。その後も雪や氷のさまざまな結晶分析を続け、晩年はグリーンランドの氷冠の融けに研究を続けました。

発行所：郵政法人切手製造局

郵主サービス社による文化人切手の初日カバー。切手発行日に、片山津や北大前の郵便局でスタンプを押して、様々な初日カバーが発行された。また、この日、郵政局から加賀市・雪の科学館と北大への文化人切手の贈呈式が行われた。

「1000年の日本の科学者」 人気投票で6位に

宇吉郎の生誕100年にあつた2000年は、100年に一度の節目として、マスコミ等で特別企画を組むところが多くみられました。朝日新聞は「この1000年の優れた日本の科学者」を問う読者人気投票を行い、宇吉郎が6位になりました。

また、読売新聞が行った識者による「21世紀に読み継ぐ日本の名著」の投票では、宇吉郎の『雪』が3位に入りました。

日本の名著 ベスト10

順位 書名 著者名 総計 男女
① 日本書紀 79 ①①



「古事記」とならぶ日本最古の歴史書。朝廷に伝わった神話、伝記の記録集。中世、近世の神道のもとになり、明治以降の国民教育にも大きな影響を与えた。

② 立正安国論 日蓮 46 ②④



災害続出の世の原因を宗教的問題に求め、対策として法華の正法を主張した。主人と旅人との問答体で著す。鎌倉幕府の執権北条時頼に治世の要道を説いた。

③ 雪 中谷宇吉郎 45 ③②



天からの手紙・天然雪の研究と道筋、自然を見る面白さを著した科学解説書。世界初の人工雪実験や、富国の生活の知恵などが豊富に紹介されている。

④ 人生論ノート 三木清 42 ③⑤

⑤ 三太郎の日記 阿部次郎 40 ④⑦

⑥ 善の研究 西田幾多郎 35 ⑤⑩

⑦ 「甘え」の構造 土居健郎 35 ①③

⑧ 十七条憲法 聖徳太子 31 ⑧⑦

⑨ 愛と認識との出発 倉田百三 29 ⑦⑫

⑩ 風姿花伝 世阿弥 25 ⑨⑤

⑪ 養生訓 貝原益軒 25 ⑧⑯

(リスト外) 「天皇の世紀」(37) 「大河の一滴」(30) 「パリ燃ゆ」(25)。他に宗教関連書で「生命の真相」「人間革命」「新・人間革命」「法華経の智慧」「太陽の法」などに多くの投票が寄せられました。

*

雪の世界的な研究者・中谷宇吉郎の著書には『雪の研究』と『雪』があって混同しやすい。前者は記録写真を豊富に使った学問的な論文集。一般に名著として読み継がれる古典は後者を指す。中谷の研究者の樋口敏二・名古屋大学名誉教授の判断で、日本の名著ベストテンは『雪』と変更しました。

日本の名著
1 日本書紀
2 立正安国論
3 雪

読売新聞2000年11月29日

読者人気投票
2000年
10月3日

「世方も味も運」

この1000年の日本の科学者 読者人気投票

	1 野口 英世 5146 細菌学者。国際的に活躍した。梅毒菌(梅毒スピロヘータ)の結晶培養に成功、ノーベル賞候補になる。黄熱病研究に努力、日本入邦のノーベル賞。徳兵衛陸地造船にも力を注ぐ。
	2 湯川 秀樹 3636 理論物理学者。中間子論を構築。戦後、その存在が確認され、日本人初のノーベル賞。徳兵衛陸地造船にも力を注ぐ。
	3 平賀 源内 1411 江戸中期に物理学者。歩脚、磁針器、磁火薬物など製作。エシキールの発明に成功。創作(げきく)、浄瑠璃作者としても活躍。
	4 杉田 玄白 1330 江戸中期の蘭方医、外科医。「解体新書」を翻訳。「蘭学事始」を著す。(写像は「朝日」大学図書館蔵)
	5 北里柴三郎 913 細菌学者。結核菌の培養に成功し、血清療法を開発。ロフミアにも応用。選考委員はノーベル賞に、北里研究所を創設。
	6 中谷宇吉郎 891 気象学者。雲の結晶を人工的に作る。グリーンランドで氷冠の研究を行う。投票も多数得ず。(写真提供 文芸春秋)
	7 華岡 青洲 693 江戸後期の蘭学外科医。全身解剖術を随伴して外科に専攻。(写像は「朝日」大学図書館蔵)
	8 南方 熊楠 679 植物学者。微生物学の先駆者。大学、学部に勝る学術研究を続けた。農学博士(イネ)などに多数得票。
	9 江崎玲於奈 629 物理学者。エネキガイド発明。ノーベル物理学賞。米IBM研究所主任研究員、筑波大長官などを歴任。今年4月分まで東京工業大学。
	10 利根川 進 434 分子生物学者。米マサチューセッツ工科大学教授。鉄線遺伝子の構造、抗体多様性の発現機構を解明。ノーベル医学賞候補。

「世方も味も運」

この1000年の日本の科学者 読者人気投票の結果、中谷宇吉郎氏が6位に選ばれた。投票数は891票だった。中谷氏は、雲の結晶を人工的に作るという研究で知られる。グリーンランドで氷冠の研究を行った。投票も多数得ず。写真提供は文芸春秋社。

中谷氏は、雲の結晶を人工的に作るという研究で知られる。グリーンランドで氷冠の研究を行った。投票も多数得ず。写真提供は文芸春秋社。

中谷氏は、雲の結晶を人工的に作るという研究で知られる。グリーンランドで氷冠の研究を行った。投票も多数得ず。写真提供は文芸春秋社。

故郷や

「父の」

目立ったネットでの投票

この1000年の日本でも最も読まれた「科学者」への読者投票結果は、2000年(朝日)の「インターネット13218」。このシリーズでも多かった「文学者」2059(631)、1418)に続く。「科学者」1859(459)、424)、「物理学」1797(439)、302)、「大衆文化」1655(389)、272)、「電脳」1411を上げた。インターネットでの投票が多かったのが特徴だった。

朝日新聞2000年10月3日

IUGGで記念シンポジウム 北大が中谷教授室を復元

2003年、札幌でIUGG国際会議が開催され、7月5日、中谷と孫野（長治）を記念するシンポジウムが行われました。また、この日、北大総合博物館に中谷教授室の復元展示がオープンし、それを記念する講演会が開催されました。



IUGG（国際測地学地球物理学連合）の記念シンポで菊地勝弘氏が紹介したスライドから。



北大での講演会の後、人工雪誕生の地記念碑の前でビールパーティーが開かれ、関係者が交流を深めた。



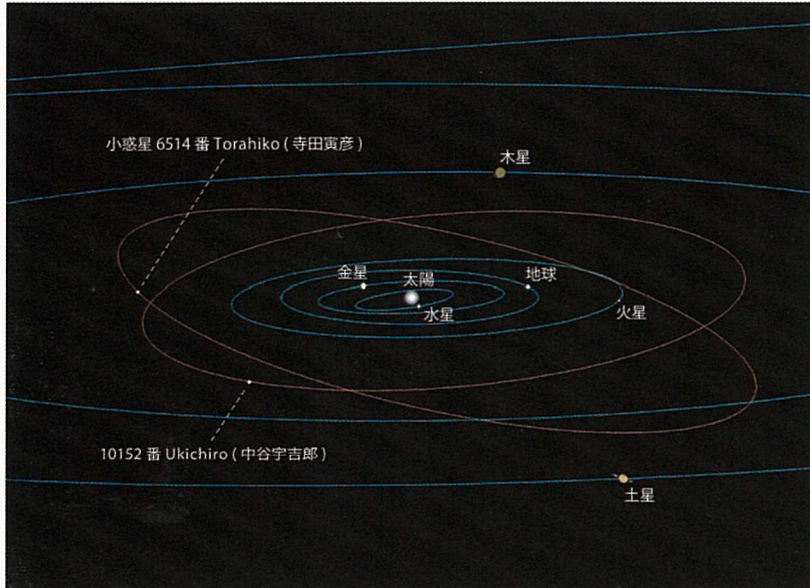
宇吉郎の教授室として、旧理学部N123室が当時の様子をもとに復元され、展示・公開された。

北大の旧理学部の建物が総合博物館になった。

小惑星ウキチロウ

2003年、IAU（国際天文連合）により小惑星「ウキチロウ」が承認・発表されました。大友哲氏が1994年に発見した小惑星の1つに、天文雑誌・星ナビが主宰した委員会が命名したものです。

■2012年1月1日の太陽系惑星と、小惑星6514番 Torahiko（寺田寅彦）、10152番 Ukichiro（中谷宇吉郎）の位置



軌道図作成協力：(株)アストロアーツ/「星ナビ」編集部

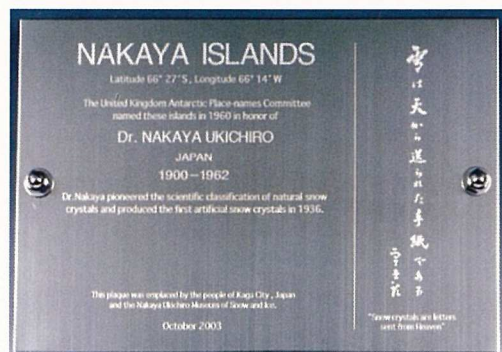
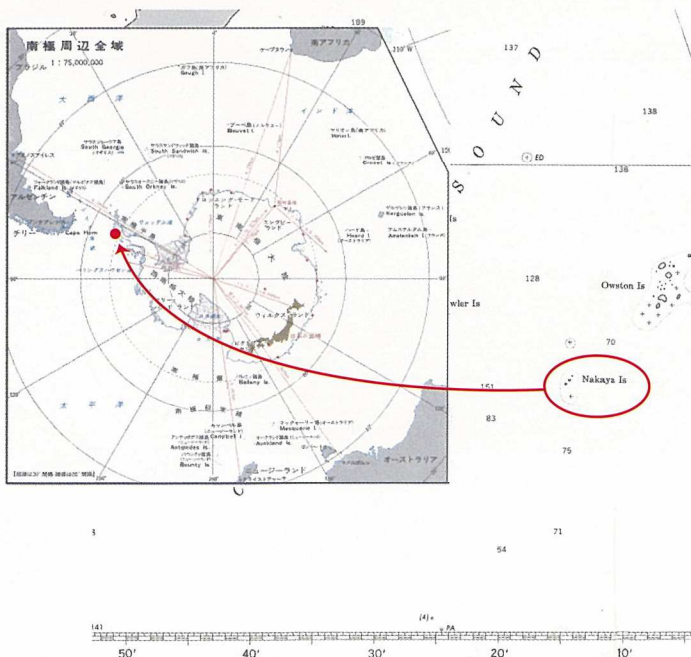


発見した大友氏（清里にある自宅の観測ドームで）。

正式名称はUkichiro（小惑星番号：10152）。宇吉郎の恩師・寺田寅彦の名の小惑星Torahiko（6514）もあり、「ウキチロウ」は「トラヒコ」より7年遅れての天界入りとなった。図は2012年1月1日の太陽系内の2つの小惑星の位置関係。

ナカヤアイランズ（南極）に銘板

雪の科学館は2004年、英国が1960年に命名した南極半島付近の小群島「ナカヤアイランズ」に設置するため、島の名前などを記したプレートを作り、国立極地研究所を通じて、英国南極調査所に、同島への設置を依頼しました。



雪の科学館が英国南極調査所に設置を依頼したプレート。

ナカヤアイランズは南極半島の近くの小群島で、南緯66° 27' 西経66° 14'。付近はクリスタル湾といい、島々には結晶を研究した科学者の名前が付けられている。

ラトビアで「雪と氷との対話」展

2005年、ラトビアで宇吉郎を軸にした雪と氷に関する芸術と科学の展覧会が、両国の協力により開催されました。中谷博士のことを知りたいというラトビアの青年からの熱心なメールが発端となり、海外での本格的な展覧会となりました。



展覧会のポスター。



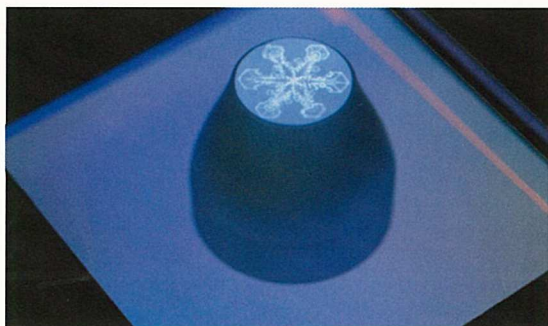
会場になった首都リガにある自然史博物館。



展示会場は多くの人で賑わった。



雪氷実験が人気だった。氷のペンダントを持つ少女。



宇吉郎が撮影した雪結晶写真が筒の表面から次々現れるアート作品（制作：高谷史郎氏）。



交流会では互いの国の歌を紹介しあった。

中学理科教科書に大きく掲載

中学校の理科教科書〔東京書籍〕に、冒頭5ページで宇吉郎の研究が紹介されました。宇吉郎の研究から、中学生に自然を探求するプロセスを学ばせようを目指したものでした。自然の見方や科学の大切な点について、宇吉郎の随筆から引用した紹介もありました。



この教科書は2006年度から6年間、全国約5000校で使用された。



雪の科学館は2007年、理科教科書への掲載を機に「宇吉郎と教科書」展を開いた。これまでに宇吉郎随筆が教科書にしばしば掲載されており、科学者の文章が国語の教科書に載った回数の統計で、宇吉郎は寺田寅彦に次いで多かった。

英国ウィルソン家から75年ぶり里帰り

2007年、「霧箱」で有名なノーベル賞科学者ウィルソンと宇吉郎の交流を示す手紙や写真が、英国の遺族から雪の科学館に寄贈されました。



寄贈品は理化学研究所の櫻井博儀氏（右端）により日本に運ばれ、仁科加速器センターで雪の科学館に渡された。



寄贈されたのは宇吉郎が出した手紙と家族写真。宇吉郎はロンドン留学の時、ウィルソンを訪ねて研究上の示唆を受け、帰国後も交流が続いた。

中谷宇吉郎没後50周年記念事業 全国スケジュール

2012年
(平成24年)

1月

2月

3月

4月

5月

6月

7月

8月

9月

10月

11月

12月

2013年
(平成25年)

1月

2月

3月

中谷宇吉郎雪の科学館

石川県加賀市
Tel:0761-75-3323



1/1 ~ 12/31

パネル展「没後50年 中谷宇吉郎を
めぐる出来事」

2/17 ~ 5/15

企画展「中谷宇吉郎と高野與作」

- 『着氷』の出版（友の会）

4/14 13:15~16:00

記念シンポジウム

@アピオシティホール

(JR加賀温泉駅前)

- 8/5 子ども雪博士まつり
- 8/26
宇吉郎科学映画上映会

- 10/13

星状六花

-篠笛、詩(日・英・Lv)、パフォーマンス-

10/25 ~ 1/29

企画展「中谷宇吉郎と寺田寅彦」

- 12/1 ~ 2013.4/30
第7回雪のデザイン賞 募集

北海道大学総合博物館

Tel:011-706-2658
中谷宇吉郎没後50年
記念事業実行委員会



4/28 13:30~15:30

記念講演会

6/5~7/29

『人工雪誕生の地の碑』

-北海道大学常時低温研究室小史

10/2 ~ 12/2

「雪と氷の科学者・中谷宇吉郎展」

1/29 ~ 2/17

「雪のデザイン展」と科学映画上映
(2/2.9.16)



北海道大学東京同窓会

Tel:03-3211-9211

4/16

記念講演会

@文京シビックホール
(Tel:03-5803-1100)

- 6/10

TOKYO純氷まつり

11:00~16:00

恩賜上野公園噴水前広場
(東京水卸協同組合)

木田金次郎美術館

北海道岩内町
Tel:0135-63-2221

秋~冬

「没後50年 木田金次郎と中谷宇吉郎」



加賀市・中谷宇吉郎雪の科学館主催の記念事業

中谷宇吉郎没後50年記念 シンポジウム

- (後援) 小松同窓会、日本雪氷学会 -

4月14日(土)

13:15~16:00 (開場12:30)

【会場】アビオシティホール

(JR加賀温泉駅前)

入場無料

● プログラム ●

◆ 基調講演

『中谷宇吉郎による雪の研究 その後』

菊地 勝弘 氏 <北海道大学名誉教授>

◇ 映画「雪の結晶」上映

◇ 朗読(随筆より)

◆ シンポジウム

『雪氷の科学と文化・中谷宇吉郎』

【司会】樋口 敬二 氏 <名古屋大学名誉教授、元名古屋市科学館館長>

菊地 勝弘 氏 <北海道大学名誉教授>

丹保 憲仁 氏 <元北海道大学総長、北海道立総合研究機構理事長>

小林 俊一 氏 <新潟大学名誉教授>

井口 哲郎 氏 <元小松高校校長、元石川近代文学館館長>



樋口 敬二 氏



菊地 勝弘 氏



丹保 憲仁 氏



小林 俊一 氏



井口 哲郎 氏



中谷宇吉郎没後50周年記念 企画展

中谷宇吉郎と高野與作

2012. 2月17日(金)~5月15日(火)

(3月29日に一部展示替え)



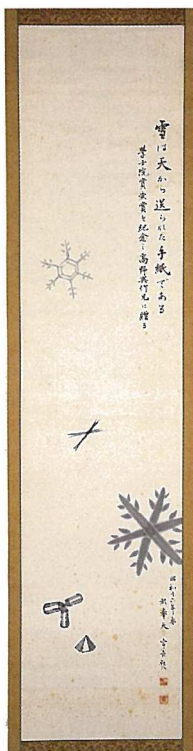
凍上の原因は
地中の霜柱だった



中谷(左)と高野(右)

岩波(中国東北部)の高野與作宅で
宇吉郎は盛んに墨絵を描いた
凍上、水資源... 與作と連携し
宇吉郎は時代に即した研究を推し進めた
親友とはこんなものだ!
親文を手掛かりに
宇吉郎と與作の生き方を紹介する

岩波ホール 総支配人・高野悦子さん(與作の三女)より
一括寄贈された宇吉郎の墨絵を公開



中谷宇吉郎没後50周年記念 企画展

中谷宇吉郎と寺田寅彦

2012. 10月25日(木)~ 2013. 1月29日(火)



中谷(左)と寺田(右)

「雪は天から送られた手紙である」と
「天災は忘れられた頃に来る」
2つの名言から、
宇吉郎と興師・寺田寅彦の交流や、
科学・芸術について紹介する。



寺田寅彦記念館の入口にある牧野富太郎筆のレリーフ。
一般に知られた名言と少し異なる表現になっている。(高知市教育委員会 提供)

